

◆フルハーネス型墜落制止用器具取扱作業◆
特別教育テスト（Ⅱ：フルハーネスに関する知識）
解答・解説

1. ×：フルハーネス型墜落制止用器具での墜落時における身体への衝撃は、最も多く掛かるのは**腿部である**。また、**胴ベルト型と比較すると約42%となる**。
2. ×：フルハーネスの墜落制止用器具の各ベルトについては、墜落時の衝撃を考慮して、**すべてのベルトを強く締めた方が良い**。肩ベルトと腿ベルトも同様である。
3. ×：ランヤードには、ロープやストラップの他、フックとコネクタ**およびショックアブソーバも含まれる**。
4. ○：自由落下距離とは、**作業者がフルハーネスまたは胴ベルトを着用する場合における当該フルハーネスまたは胴ベルトにランヤードを接続する部分の高さからコネクタの取付設備等の高さを減じたものにランヤードの長さを加えたものをいう**。なお、作業床の足の位置から墜落したときの足の位置までの高さ（長さ）でランヤードの伸びを見込まないものとしてもよい。
5. ○：建設業等に使用するタイプ1のランヤードは、D環の位置1.45mからフックの取付位置となる手すり高さ0.85mを差し引き、それにランヤードの長さ1.7mを加えたものが自由落下距離となり、この自由落下距離にショックアブソーバの伸び1.2mとフルハーネスの伸び1mを加えたものが落下距離となる。この結果、落下距離は、4.5mとなるため、これより低い高さでは、墜落時に地上に到達する。
6. ×：ランヤードの取付位置は、極力腰の位置より高い箇所を選定する。また、**ランヤードの長さは短くしたり、巻き取り式を採用する**。
7. ×：墜落時に地上に到達するおそれのある高さで、墜落制止用器具を使用する場合は、胴ベルト型（1本つり）の墜落制止用器具を使用するか、**タイプ2ではなく、タイプ1のランヤードを使用して、地上への到達や激突を防止する**。
8. ×：第一種ショックアブソーバと第二種ショックアブソーバを比較すると**第二種の方が性能が高く、腰より低い位置に掛けることが可能である**。
9. ×：親綱支柱の間隔は、**10m以内とするように設置する**。
10. ×：ランヤードのうち、フックとショックアブソーバを接続する部分の種類・材質には、ロープ式、ストラップ（帯ロープ）式およびストラップ・巻き取り式などがある。**ロープ式には、三つ打と八つ打ちがあるが、八つ打ちの方が取り扱いやすい**。